官版

# 語彙

卷十一

ホ 2
4706
11

門 ホ 2
巻 4706
巻 11

明治十四年五月

# 語彙 宇之部

文部省編輯局

門 ホ加 4
巻 1 4

語彙巻十一

宇部一

う

うゐあふのうゆく諸の詞をう 万十六 いなも諸九わりそるゆふゆたべしかくち見

ゆくゆ我もようあん 拾玉二 さそとりのちぐゆくとふさぐと

あどうちてあやうやとりふ人ぐゆゆもあ〜

う

うめく聲あり 宇拾三 うとりひくくろ〜ろ

ぐやふくをふ〜かくりたも

う

物事思ふさゆあ〜で心のくる〜ひをを云○憂

古今雜下 ちかりくくそひくもあくふくと〜

あもびゆづあだかもぬあおう世の中 拾玉六 古郷を出て

後くと思ひちもあおうあくもの世のあ〜ひくも

う

鬼ふ同じ 天廿七 露ふふそうのけのいかふ

ちをくるらん月の桂のかげをたのみて

う

十二支の卯をいふ三十六禽を配當そもも

うの時ふ出たりひて朱雀より五條の

大路を西ぐやふをもたりゆふ

卯い鬼ふあくもう故ふうといふ 源行幸

う

水中ニ在テ鉄魚ヲ捕ル種類多シ各條ニ出ス

和鸕鷀俗云ウ 万十九 早湍ゆく水鳥を潜けつゝ

水鳥ノ形狀大低鴉ノ如ク全身黒ク背肩微褐色ヲ帯ブ長喙ニシテ末微ク曲リ

詞の下に添へていふあるいはゝ

う

き露のかきりうたもまことに紫深き秋の花かな 後花園帝御消息 人の存じ候ちんきるこゝろかつういちをしきやうに候

ごとおどのうゆて別に意あり 六帖六 色深

う

式部續集 あとせうといひしる人のわとせ終ば 平家五 四五百千より多いやらう きくあいやらうい知り候ちゝ 又 からめうと申者一人も候いさうしに

將然言のむを音便ていうといへるあり方今俗語の將然言は皆此音便を用ゐる 和泉

うあいさ 俗

鳥名あいさの一種にて頭い巫あいさの如く其嘴長くして鸕鷀の嘴の如し

うゝる ヱウ ウル ウレ

草木を植立るをいふ又子を土に蒔をもいふ 万十五 人の宇々流田いうゑやさぞいまさいふに

草木をいふ

ふこふろれゝてあもいらいわひりとい者りもあるあり

伊忘草うゝとたふきゝ物ないふ靈異上 誠知先世殖大力曰今得此力矣

うゝる ヱウ ウル ウレ

食無くて腹中の空虚あるに苦しむをいふ 字 饑 伊比ホ 宇々

心の惚惚にして落居なをいふ轉じて覺えを事を為るをいふ 椿葉記 世中うかゝとしてうかゝからず

うか

年ゝとも 小夜寢覺 男に女ゝ正直に道理をあらたらんよう

うかゝふ ハヒフヘ

事物の狀態を竊に見ゝ聞ゝ又思ひ量るなどをいふ 神代紀上 敢窺竊此處乎

源タ良 曉の道をうかゝもせ御あり見せんと尋ゝと 字 闕 字加 加布

うかもせ セスル スレ

物をうかゝもるをいふ 狹 活本三 いろゝに織物を掘又貫をいふ 記中 自其地踏穿越幸于宇陀 以字 穿 貫也

うがつ タチツテ

うかい食して食の靈をいふ

うかのゝま

記上 宇迦之御魂神

うがい

小魚を鸕鷀に咋へて捕るをいふ 万二 上つ瀬に鵜川を立て下つ瀬に小網さしてゝ

又十七 うあひ河清き瀬ごとに宇加波 たちかゆきかくゆく

うかひ

義解 謂鵜飼江人網引等之類

うがひ

云々御うがひも氷りて持給へる

水を御口に吐出して口を清むるをいふ 記上 志麻都登理宇加比賀登母伊麻須氣尓許泡 職員令 水鏡上 水を取て御うがひを奉り給ひしつゐでに

うかぶ バビブベ

うくゐ同ト 神代紀上 猶浮膏 万四 かも鳥のあそぶこの池に水の葉あり浮心ゆ

もとあくゐ 大井川行幸和歌序 秋の水ふかうかびてうなばら木の葉とあやまるもの○又轉じて人の發跡をいふ 源 澪標 とうかへ〳〵花やゑ給へば御子どももあづむやうにて物〳〵給へるを皆うかび給ふ○又物の定まらぬをいふ 源 帚木 女のもとにせいうかびうるあんあるもの待る 又夕顔 うかびうる心のもとびゐ人をいとゞうゝふあ〳〵つるかゞとれひぬべきかいとかゝれあり○又佛家に死人の轉廻を脱して往生するをもいふ 風雅 釈 沈みそ〳〵うき身いのいつうかぶべ紀誓の舟の引うふあるもの 謡曲 鵜飼 あ〳〵くゐ沈みそ〳〵浮び難き罪人のうがひもるをいふ 類名 漱 漱口也

うがふ ハヒフヘ

以字 漱 漱口也

うかぶる ベブブルブレ

物を浮かべるをいふ 轉じて人を發迹しむるをいふ 展中紀 迦葉かの沈給ひ〳〵よのむ〳〵のいうかべ沈めいとかゝるそれ思ひそい給めをも○又轉じてあ〳〵そをといふ 源 槙柱 るゐ汝万里をもの沈て來るもるをうかべもとて水をあるへいるあり○又暗誦もるをいふ 枕 さて古今の歌もるを聞うかべるせたかそんを御學問ゆ せさせ給へ 榮 玉の臺 倶舎を誦ド唯識論をうかぶ

うかゝ

うかゝる見るをいふ 推古紀 新羅之間諜者迦摩多到對馬 以字 間 覗見也

うかむ マミムメ

浮ゆ同ト 耕雲口傳 自然ゆ歌ゆ心うかゝたる時ゆ

うがん 薩摩 俗

鳥名、雁の一種あゝゆひ

うかんむり 俗

かゞんゆ同ト

文字の上ゆ冠らもるウ字の形片假名のウ字ゆ似るる故ゆいふ

うがも 俗

鳥名、鳧の一種全身淡黑ゆ赤を帶び稍黑き斑文あり嘴細く尖りて脚赤し

うがら

生族おて親族をいふ 万三 問さゝる親族兄弟あり國ゆ渡り來りて 顯宗紀 親族

うかり 俗

不意なの意なり

うかり 近江 俗

魚名、鰻鱺の一種なり首小さくして長さ二尺に過ぎず

うかる

呀浮かして居つかぬをいふ 神代紀 洲壤浮漂 譬猶遊魚游水上也 万十一 そこの江のつりうかるのうけのその得干蚊母かんこひつつあるべべ

源葵 うつくしとあがもゆ心ぞうかるもゆ

うかき

天智紀 二月造戸籍、斷盜賊與浮浪 和遊行女児 字如礼女 夫十七 月さえて山いかの枝のあづさゆみかがらせのよるべ鳴らん 小島口號 いとど又うかれふうきそふ

そこふ

そこの夢のまくまも

うき

うきくもうきくもの類浮びたる物を云へり

千載 釈 さざめあれ身いうれ雲のよそへつつ

いそなもかからげど 万七 吾情 新六三 浮島のさあらら濡る水遊び何ぞ

てゆゆを 能宣集 やどるらんかつ浮尊へあるあれ浮嶋のうれたつこれる

戀もるかも ○又泥土をいふ 六帖三 あしかたうれいうべうそつき

あけを下いえそらぞ思ふ心を 字拾十三 皇嘉門よりい西人に住かうれ

のゆうつとしかる一町ぞかりあるうきあり云々ふうれうれあまど畠

かも作らるべし 類名 浪 ○又古言に酒盞をいへり 記下 美幣能古賀

佐々賀世流美豆多麻字岐介 釋紀十 筑後風土記云昔景行天皇云云勅

曰惜乎朕酒盞 俗語云酒盞為字釈 ○又俗に

漁具泛子をいふ

うき

クシキ

憂きうて物事思ふ様にあるべし心の苦しむ

もとひそかに移り鳥あるべしあるべ

ふるべあわ人い身をきへもつせて 万五 世の中をうつとやうつと思へど

入らんまい思ふ人をそうつありあるべ 和泉式部集 ある身のあの下まも

あるのうれ移りとあつと人もうらめや 古今雜下 世のうきめをえぬ山路へ

涙かあうれ名をもつぐ 金葉恋下 あるうれあど江にあるる

瀬うもあるらん 後撰別 忘るあとうふあがう

うぎ 音

禁中の行事の畧儀をいふ原雨中うい其

云々雨儀立仁壽

殿西階下

儀を省くを以てかくいふ 江次 小朝拜事

うきいし

浮石に同じ 大同類聚方残篇 宇支

以波 今云如流以之

うきいを 伊豫 俗

魚名、丁斑魚ハ

同ト

うぎそう 俗

海藻名、石花菜ハ似て枝叉多し〻〻稍細長

生時紫色曝せば褐色ハ變ぜ〻を煮て

褐腐の如く製を筑前及

越前ハ産を

うきく〻

物の浮く又心の浮く狀態をいふ 新六 君

とのゝ生るあき〻の池水ハうき〻とのゝ

あるところ

かゝわ

うきわりのの

細小の文を遍く織浮かせる帛類をいふ

也 助無智秘抄 えひ染のうき

宸翰裝束抄 童體の人面白浮織物文葵重文

わゝものゝきぬ

うきて〻

水上ハ浮へる木をいふ漢張騫の故事又法

華經浮木の事あどふ喩へて云り 躬恒集 秋

の浪いとゝあをきもあるもあへをうきゝふあをん

華經浮木の事あどふ喩へて云り

ゝゝゝゝもかゝれ事どもかな 和 植 和名字 岐々 ○又俗ハ魚名陸奥常陸邊の海

ハ産を形扁圓ハして大あるゝ丈餘背鬣と後鰭と長大其皮黛魚ハ同

ト色黄褐ハして白點あり或い黄色ハ細點あり一様ゝを又うきゝ

ゆんでうゝゝゝもいふ○鰤車魚 料理物語 浮木ハ

さゝゝゝをあるうげを

うきらさ

草名、止水ハ浮び生を葉二三分圓ハゝゝ

多の鬚根ありて水面ハ漾ふ○紫背浮萍 古今 雜下 光ハり面綠色ハして背紫色三葉の下ハ

きの根をゝゝてきをゝ水あゝぶりあんとぞ思ふ 和 萍 和名字 木久佐 ○又池澤田中

ハ生ド大さ寸許四小葉合て一葉をあを夏月別ハ莖を抽きて花を開き

白色四瓣あるうめをを云○蘋 本和 水萍云々一名水中大萍、一名蘋 大者也之上二名出蘋 敝庄馬名字 岐久佐

うきぐつ 俗

水を濟るハ身ハ副て沈まぬ爲ハ造る器

うきこ 俗

あり革ハて作る形種々あり○浮嚢

麺粉の極めて細末ハ一ゝるあて果餅ハ作

うきを

ハわのうきをのゝを來てをてゝとをもやをぐゝ

り又臙脂を凝むるハ用ハる

鶻鷂の巣をりふ水の高低ハ隨てうゝゝあ

きゝせぬ○又尾張の俗ハ魚名、丁斑魚をりふ

げゝゝゝ造るもの故ハりふ 頼政集 子を思ふ

うきをのり 俗

海藻名備前産紫菜の一種あり

ふちとのりハ同じ

うきた 大坂 俗

魚名、丁斑魚ハ

同ト

うきお 俗 菜名、蕪菁ハ同ト

うきぶくろ 俗 魚鰾ハ同ト

うきんだよ 西京俗 魚名、丁斑魚ハ同ト

うきゆうきん 音 右京職西を右京と云其右京の事を掌る廳あり

職員令 左京職准此

うきやがら 俗 草名、黒三稜ハ同ト○又草名、荆三稜を云ふ

うく カリ キリ ケリ 水上ハ沈すべしてあるたつふ又轉ト云雲あるのたぐふよふをもいふ 神代紀 又浮濯ふ命浪の上ハ宇伎てしをもいわくうきぬをもいふ 千載 巻五 君うつるとうきぬるたのめきよ更てりあるつをうゐむをぐるをうらうるやうゐあぐされてあやまちうしろ給ふ 源 葵 げすや御ふちも

うぐさ 俗 草名、狗舌草をいふ○又草名、楽姑草を云○又草名、長門ハ云、積雪草をいふ

うくた

景 魚名いぐひハ同ト 景行紀 昔筑紫俗號盞曰浮羽 夫ハ かがり火の光ハ又かがふ玉藻まいうぐひのいをもかがりをさり

うぐひ

けり 料理物語 鰍 あやうを汁

うぐひす

鳥名、繡眼兒ハ似て肥え其背緑褐色其腹灰白眼纖く嘴細く尖あり 脚掌共ハ灰黑色眉ハ三毛あり〻〻灰白色吻ハ三髭あり其聲ヨ等級あり上品下品ヒ分つ○柴鶺鴒 続後紀 十九 梅柳常 殊 敷榮 咲 開 天 鶯 聲 改 互 和 鬨 楊氏漢語抄云春鳥子宇久比須 春鳥也○又俗ハ厨 鬼名、せつくるハ同ト○又香を焚ハ用ふる器の名、長四寸餘両頭尖を見る鬼あり○又周防の俗ハ草名、山慈姑を いひ播磨ハ駅 蘭 をいふ

うぐひすかひ

聲よく鶯を養て賣る人をいふ 三十二番 職人歌合 鶯飼 そもたハ花のたもあらハ

あるどりおそらそちハ
いぐあいせん

うぐひすぢぶひ 俗

介名、くぢゃくがひハ同ト○又介名、瑇瑁の一種あり大あるハ長三寸餘ハ至る其殼長

くゝと傍へ翅の如く張出し
鳥形ゆ似たり故ゆいふ

うづひもさう 俗

草名、るりさうの一種ゆゝて葉長大毛茸あり夏月細莖十餘を出も細軟ゆゝて立さも
五出の碧花穂状をなゝて開く

うづひもたけ 俗

菌名、春生むる紅菰ゆゝて
食用もべくもの多し

うづひもるゆ 俗

莱名、春夏食用ゆもる一種のこもらゆあり
莖葉瘦て光澤あり

うづひものひ孫

灌木名、恒山の同ド

うづひものき

灌木名、高五六尺枝葉對生も葉卵圓又長
葉あり春月葉間ゆ絲の如き莖を出も五
出の小紅花を開き後赤小豆大の實を結て紅熟も

〇驢駝布袋和鸚實俗云阿宇之智一云宇久比須乃岐乃美

うづひものさるがた

蔓草名、葉毎ゆ二の鬚ありて物を纏ふ葉圓
扁ゆゝと厚く光あり大なるは三四寸葉脉
直ゆ通る莖ゆ硬き刺あり新葉の間ゆ寸餘の花莖を出し六瓣の小花
簇り開く淡黄微緑大さ二三分後實を結ふ大豆の如し秋ゆ至つて紅

熟も本和抜萆和名宇久比須乃佐留如波一名佐留止利一名於保宇波民

両頭尖もる餡餅ゆ青ぎあるを
抹したるをいふ

うづひものち 俗

鼠屬名、うづろ
もちゆ同ド

うづら 三河周防俗

浮ふるをいふ万二次てくる中の水門也船
浮けて吾こぎこるもの樂衣の袖あるをふしの

うづる 例ノ如ク

契もたるをつきせ孫ぶ枕をうづる涙ありけり〇又他より受け取る
枕を記中故受取其横刀之時類名受〇又受るより出て心中ゆ領兼
し又身ゆひ紀うづるをもいふ欽明紀輙信世言輕被謾語源御法あや
しきまて思ひくうけうづるある人をもいふけらも又東屋守のかくあるたゞ〇き事
ゆ思ひくうけうづ
きうづめもべ

うづろめち 中國俗

鼠屬名、うづろ
もちゆ同ド

うづろつ 音

迂闊の音ゆ
もちゆ

うけ

空虚の義ゆゝて馬槽の如くあるものあり
記上於天之石屋戸伏汙氣而踏登杼呂許

志 仲代紀上 覆槽置 覆槽此云于瑳

うけ

の浮の緒のうかびらゆかん戀〻

あ〻ぢゐ 和 泛子 漢語抄元字氣

釣の緒又引網に着て浮ぶる具なり製作一なるを 万十二 もろの江のつりあぢ紀

次條うけうとに同じ

海藻名石花菜に似て細長紫色あり晒して黄白色となるを煮て瓊脂の如く製し

うけう 俗

うけうと 俗

食用を筑前に産を紅色に染うるを

ちゐうぐ〻のうとゐふ

うけがふ ハヒフヘ

彩諾をいふ

以字 香 ガフ

うけぐふの體言なり 落窪 三 うけぐふ御忌日なる物を何うけぐひあ〻んとのゝぐ

穿沓あて獣をたる沓をいふ 万五 字既具都をぬぐなる如くふをぬぎて

うけぐひ

朝庭に受ひ受ひる事を奏聞するをいふ

江次二 藥殿請御藥并雜器請奏 又三 坊家

うけぐつ

妓女裝束依請奏給之 朝群五 内裡

御八講用途請奏

うけたまはる ラリルレロ

上旨を受聽をいふ 孝德紀 諸百姓等咸可聽之 續紀四 衆受被賜而恐 義 仕奉○又轉じて人の言語管絃あゝど聞をも敬しをいふ 源 紅梅 御琴の音をたまはるうけたまはりて久〻あり

うけつ 俗

介名、あふむがひに同じ

此方に物を受とる證書をいふ

うかのみたまに同じ

うけとり 俗

うけのみたま

和 稲魂 和名字介乃美太萬

うけもちげ

呪詛がやしをいふ 源 紅葉賀 弘徽殿あゝどのうけもちげに

うけぢる ラリルレロ

思ふさまに專に為るをいふ 源 相夢 人もえ

ぬ事あ〻 狭三 きるべくかんぶ

給ふさまを 枕五 いとぐうう

うけもちめあどうけぢりてあるに

うけひ

神に誓て祈る事を驗をいふ 神代紀上 誓約之中 誓約之中此云宇氣比 靈異下 祈禱 有介此

うけひく　カキクケ

ちはやうけひく申給ひつ　拾遺　神樂　ちはやぶるけふからさるかも

あろらもあを神のうけひくあるもしありけり

うけふ　ハヒフヘ

得飼飯てめもとのゆめ見えらぬ　記上　答白各宇氣比而生子　方四　ちやうらをとゝやゝ妹が此ところい

もあれ人とうけへばゝもとぐきゆのが上りそわふとゝふある　源　蓬生　大

將殿もやんごとなくゝもえきこえ

たゝてゝ　おどろんじうけひろう

うけふ同ト　儀式五　御巫覆宇氣槽

四時祭式　宇氣槽一隻

其事と兼もる由の文書あり　東へ　雖

うけぶを

被尋面々地頭請文等

うけを　俗

相撲并ゆ栗術ゆふ語あり他より來る

と此方ゆて受る設もる意あり

うげん　音

纁　綱ゆ同ト　枕へ　昔ゆわえてふようゆる

うる　中務内侍日記　うげん二帖の

ものうげんべりのかゝのふりてふゝ出

上ゆ御ふうゆ稼ゝゝゝて

うけむけ　音

たる事あり有卦ゆ入い七年

凶多ーとゝふ　尤草紙　めでうけるものうけぶる

有氣無氣又有卦無卦又有慶無慶あどの

宇を附會ゝて五行の相生相刻より言出

卦ゆ入い五年

うけら

草名、ゆ同ト　方十四　こひゝけば袖もふらん

をひきゝゝの宇家良我波奈のいろゆづゆ

ゆめ　又　あさかぐたあゆひのゆ

宇氣良我波奈のいろゆでめやも

うこ

ゝゝゆ同ト拙くて笑ふべけをとゝへ　應神紀

阿餓許居呂辭伊夜宇古琲辭氏

うご　播磨　俗

海藻名、あをゆ

同ト

うごかす　サシスセ

きづゝゝ物をうごかすあり　源　夕貌　ひきうご

かゝ給へとあゝとゝて我ゆもあゝぬさま

あもび　古今序　天つちをうごかす

見えぬ鬼神ちもあゝもと思ふせ

木名、五加ゆ同ト　料理物語　うゝぎ茶、

うこゞ

ゝゝもくゝこの如く仕候

うごく

動く事をとゝへ　源　朝貞　更ゆうごけあき御心

うごけ

あもび　榮　玉村菊　うごきなゝてあそゝゝやもを

うこぎゆんぢん（俗）　草名、かのあげ
うこぎゆ同ト

うごく　加キ　ク　ケ
あちらこちらてあるめをいふ静ゆるの反對あり
○動原夕貞右近るうごくべこちゆあらあらあらこちたてあるめをいふ静ゆるの反對あり
秋風ゆ人の心もうごくぬるかな　海藻名、わごゆ
同ト

うごとぶ　播磨姫路（俗）　人の集うごと云雄略紀毎日朝參國司郡司

うごあるる　ラ　リ　ル　レ　隨時朝集儀式五辨大夫申天云大祓處今

參集　讀曰未為字古那波礼留

うごゆ　穀類あり方莖三四尺葉長〳〵三尖蘭草の如く對生も夏葉間花を開く白色微紫
を帯ふ花後觜を結ふ六稜或い八稜内ゆ細子あり〳〵もと食用ゆも又
白油麻あぶらごゆ初ごとごゆあり和胡麻音五万詔云字古ホ宇藤原君うごゆいあ
ぶらゆ赤ちりてうるゆ
あちらくのせゆゆでく

うこん（音）　草名、形蘭蕉ゆ似て粗大高二尺許秋月葉心より花を出も多の小苞を雛次も白色

苞の末紅を帯其苞間毎ゆ三四の黄蕋を出も其根香料涼料ゆ用ゆる
○鬱金薫集類方きくゆる鬱金ハゆ〳〵ちてきものの色あり○又草名より
出く黄色の別名とあるるあり布衣記舎人の事立烏帽子ゆうこん涼
の走水千上下同あり又好絹をうこん涼ゆ色を附○又周防の俗ゆ草
名博落廻（こばぎ）
をのふ

うこんのつかさ　うこん（音）　天子の御座近く侍〳〵て警衛もる武官ゆ
以中衛為右近衛源桐壺右近衛為左近衛職原抄下大同二年勅
こゆ聞ゆるいふ〳〵ゆありぬるあるべ〳〵　右近のつかさのかみる申の

うこんだゆな（俗）　木名、山中自生多〳〵高丈許春初葉ゆ先ち
ゆ〳〵て三尖あり　て小黄花多く攢り開く葉の經三寸許圓
○三極烏藥

うこんゆふ（音）　右近衛の官人の府あり古ゆい上西門の
傍ゆあり職原抄下左右近衛府

うごめく　加キ　ク　ケ　動くけ〳〵をいふ父子相迎上虫うごめる
射まどうちふ　をもうごめく今昔廿五員をうこ〳〵く
籠りて蟲く

うごも　陸奥㊞　海藻名、海蘊ヵ
同ド
うごろ　備後㊞　鼠屬名、次條ヵ
同ド
鼠屬、土中ヵ棲む形狀鼠の如くゆゝて肥て扁ゝ長六七寸毛柔細ゆゝて微黑、喙尖尾小ゝ短ゝ本和鼹鼠和名宇古呂毛知
うごろもち
うて淡紅色後足小く前足い至大ゝを以て土を穿つ
うごもる　引引ルル
土の高くあるをいふ
類名墳ウゴモル
うさいかく　音
犀角の色黑きをいふさいの下併見へゝ○烏犀角
うさぎ
小獸名、長さ二尺許耳甚長く全身灰褐色ゆゝて前足短く後足長ゝ口上唇缺て長き鬚あり記上於是到氣多之前時裸菟伏也和兎佐木宇散木下とりとゝ
つまどうさぎたありけり、果うとかきてやぐりもきゝゆまつど
うさぎうま
獸名、形馬ヵ似て小く耳長ゝて足短ゝ全身灰色ゆゝて脊上ヵ黑條あり肩すて十字形とあり推古紀百濟貢駱駝一匹驢一匹羊二頭白雉一喉本和驢和名宇佐ヵ
うさぎまた　虫名、竈馬ヵ
同ド
うさぎむし　俗㊞
茶家の用ゐる茶碗の名ゆゝ名物七種の一なり庭訓往來胡盞君臺觀左右帳記烏盞
うさん　俗㊞
たうさんのありめて土らもり建盞と同物也
○又俗ヵ疑ひ怪しむべきをいふ
うさめづる
かゝるべゆ儲れゝ弓弦をいふ仁德紀于瑳由豆流多由磨菟餓務珥記下爾自項髮中挑出設弦一名云宇佐由豆留
うし
うし
あり農家ヵ從ある者ハ形小ゝ是犇牛あり車ヵ服る者ハ形大ゝて力強ゝ是吳牛あり記下何汝飯食負牛入山谷万十六馬ゆゝてふのごしゆゝ主と同意ゆて人を尊ぶゆゝふ神代紀下故仍遣其子大背飯三熊之大人大人此云于志
獸名、形馬より大ゆゝて足短く體肥て頭ゑ両角あり尾短小ゆゝて蹄相分もり二種

もの牛ふ[牛和名之土畜也]○又十二支の丑をいふ丑
い牛ふ當まり故ゆいふ[宇藏開]うしのゆへと申ちい夜ふけゆけり[夫十九]う

しのくひさちぐゆ月の影出て
心ちむ夜の時のふさかな

## う

虫名、蠅食物中ゆ卵を遺しとあるもの一頭
尖う一頭齊しくして截なるが如し長一二
分後彼化して蠅とある○蛆[記上]宇士多加禮斗呂々岐豆
[字蛆自字]○又近江の俗石炭をいふ

草名、雞頂草ゆ
同ト

石名、水中白石ゆ
同ト

草名、蕣曰藍ゆ
同ト

魚名、次條ゆ
同ト

魚名、海鰍魚の一種色黑して大あるをいふ
六尺許ゆ至る者あり○牛魚

草名、石蒜ゆ
同ト



牛養の義牛をあらふ賤者あり[枕三]
かひらのあり〜てもたるこそ
あまを[源東屋]下らふのきつくひひ
あらぬうかひつくり出てつかもも
あらも

介名、蠻螺ゆ
同ト

海藻名、大葉藻ゆ
同ト

魚名、黃顙魚の形大
あるをいふ

草名、萹蓄ゆ同ト[本和]萹蓄
[和名多知末久佐名字之久佐]

灌木狀の草あり大あるい三四尺ゆ至る胡
枝子ゆ似て葉細長し夏末花穗を出ち豆
花ゆ似て小く白色淡黃を帶ふ　又草名、
冊後ゆて芎藭をいふ

病牛を療ちる醫をいふ
[以字]牛醫

蛇名、風梢蛇ゆ
同ト

筑前

うーこん

牛ゐ繋き着て地を耕せる具あり

以字 犁 耕墨也

うーごるま

牛を服たる車なり 續後紀十三 童謡曰玉児牽枯乃坊余牛車 波善 兼牽夜 源 薄雲 たゞ御位を

ひゝくうーごるま
ゆるさまして

うーごうと 筑前 俗

草名、栝樓の類ゆして花實葉共ゐ栝樓ゐ似たり只其莖稍軟あり實い圓扁ゆしく味苦を帶ふ○又筑前ゆゝ栝樓をゝる然唱ふ

うーこべ 豊後 俗

草名、栝樓ゐ同ド

うーこむー 仙臺 俗

草名、栝樓ゐ同ド

うーころー 白河 俗

并ゐ虫名、砂按子ゐ同ド

うーころー 俗

武蔵ゆてい木名、樹の高さ丈餘葉落霜紅ゐ似て長く互生せ夏月枝梢ゐ五瓣の白花を開く山擅子ゐ似て微小後小豆大の實を結び紅熟せ○老葉児樹○又下総高野村ゆゝい草名、落新婦をいふ

うーさゝ 土佐 俗

木名、水蠟樹ゐ同ド

うーつゝ

牛かひゐ同ド 大鏡三 さるべ其そういうーかひをばうーつゝとのゝふあり

うーどぶゆう 伊豫 俗

魚名、泥鰍ゐ同ド

うーとら

東北の間艮の方をいふ 枕二 清涼殿のうしとらの隅の北のへにある御まうしゆい風すい侍りきべ

源 野分 いとうゝめーう吹ぬべき風うーとらのかるよりふゝ侍きべ

うーどか

獣名、狐ゐ同ド 推古紀 陸奥國有狢比人以歌之

うーおふ ハヒフヘ

ある物をあゝせるをいふ 記上 都不得一魚亦其鉤失海 万十五 あるうゝへの我あるうゝを宇思奈波受 ゆてをあふゆでゐ○又轉ゝて人の死ぬをもいふ伊下 むゝー男友だちの人をうーあゝるる許ゐゆゝける

うーのからびゝ 南部津輕 俗

草名、苦蕎麥ゐ同ド

うーのけぐさ 俗

草名、龍常草の一種葉至て細く長尺餘地ゐ擂ーて一寸ゐ叢生せ

うーのゝつの

牛角中ゐある堅き骨をいふ血分の藥ゝせ 本和 牛角鰓 和名、宇之乃古都乃

うゝのさうめん俗　草名、蒐絲子ゆ

うゝのさる俗　同ト　東國まちい魚名、鞋底魚をいふ○豊前ゆちい木名、天仙果をいふ○山城まちい草名、狗舌草をいふ○備後まちい草名、羊蹄をいふ○土佐ゆちい草名金瘡小草をいふ○河内まちい菌名、蜀椒をいふ

うゝのさひ俗　草名、括樓ゆ　同ト

うゝのたま俗　犇牛肝胆の間ゆ生ずる一種の酥酪ゆしゝ大小等しからざるを破るべ相疊る事酥酪の如し内黄ゆゝ白點を交へ微香あり○牛黄

うゝのち　牛の乳汁あり補虚の藥用ゆ

醫心二牛乳和名守之乃加

うゝのつのゞひ俗　介名、形牛角の如く長寸餘縱條あり て色白し又淡褐あるあり

うゝのつのつゝ俗　牛を鬬らせて勝負を見る戯をいふ

うゝのゆんゆく近江俗　草名、石蒜ゆ　同ト

うゝのさゝぶき俗　草名、大蓼ゆ　同ト

うゝのさあぎ　牛の轡ゆ横ゝ係る木あり和巻牛乃波奈岐

うゝのひゝひ　○又俗ゆ木名、英遂をいふ

石龍蒭一名大都方比計　草名、燈心草の類あり細くして二尺許備後ゆく多く植作り席を織る草あり本和俗ゆ草名、苦蕎麦をいふ○又草名、石龍芮牛乃比太比草名、江板歸をいふ○周防ゆ石龍芮牛乃比太比○又佐渡の木名天仙果をいふ○又備後ゆ草名、括樓をいふ○越後ゆ

うゝのこ安藝俗　草名、地湧金蓮ゆ　同ト

うゝのめい阿波俗　石名、質黒緑ゆゝて銀星あり煆く時い金星ゆ變ず○青礞石

うゝそく加利久加　其所をうけもち領ずをいふ記上汝之宇之波祁流葦原中國者万五神づゆり宇志播

吉伊麻須又此山ゆ牛掃神之

うゝそゝべ俗　草名、繁縷の一種葉の長さ寸餘ゆ至る者をいふ

うーぢん（俗）　虫名、大小二種あり形蒼蠅に似て扁く利嘴あり牛馬の血を咂ふ○底蚤

うーぶいぢら（俗）　うーぶらー　伊豫（俗）　虫名、并に金亀子に同ト

うーぶどう　紀伊熊野（俗）　草名、北五味子に同ト

うーわ　海水をいふ　齋明紀　海難度能于之哀　能矩娜利和　潮和名宇之保

うーわわ　羨の製方あり　四條流庖丁書　うーわわの事云々浦うとうあを汲て鯛を煮てゆわうせしよう始るあり　宗五大草紙土　初獻あらもの鯛如常うーわわあひの物に入て

うーわぢる（俗）　草名、龍葵に同ト

うーをう　古へ丑の刻を五に分て其第三にあたる時をいふ　拾遺物名　人ごろうーをうあり今いにわ分るあり一夜に二十五點ありといふ夜戌亥子丑寅の五各五點づゝ是べて二十五點あり

うーむー（俗）　虫名、砂按子に同ト

うーもめら　石見（俗）　草名、石蒜に同ト

うーや　牛を養ひく所をいふ　宇空下　うーやよりて牛ども十五許きぬきせつゝ並てうふ

うーゆきつ（音）　果名、橘の類にて實の色蜜柑より赤し二三月に至て其味殊に美あり　庭訓往来　橘雲州橘　尺素往来　鬼柑子雲州橘○又一種變生の橘を俗にうーゆきと呼ふ蜜柑より大にして味酸苦食ふに堪へぬ

うーろ　後遺をいふ　齊明紀　于之盧母倶例尼　榮本の かうーろんにうーろとあてうーあとあさせ給へ　今昔サセ　六角堂の後合せにぞ事をもいふ　源椎本世　をうーろんうーろの事あるべき事ういにぞ　盛衰四十六　○又轉して見えぬ所又所後の頼朝もうーろいふせー思ふあるべて追訓のうーろをさーをさこと給へ　又八若をもうーろぐら紀御事にあるひ奉うて

うーろで　後方の意にて背面をいふ　記中　宇斯呂傳　波衣陀豆呂迦母　源須磨　むあーー歸ちんうーろでもとあるべー　仲文集　をむ紀ぬるうーろで極樂にむもちん君ゝ瀬をとて思へ

うらべる

うらべると思へどそむくを見ぬめぐ心のうらべるさうゆ

うらべる

きるたのもしけある事とおぼしうらべるきだめて

うらべる

後より看扶る意あり 源 賢桂 とうらべの契たがへぬかうらべるとあやせど

落窪四 かうらべるかゆうらべるぐあること

うらべる

人あらんよりい

うらべる

せうらべ 源 若紫 うらめるけゆ思へうらべ人もいるあらん

うらべる

後目痛の意ゆて見ぬ所後の事のうらゆかうるをいふ 古今秘上 をうらへうらべ

うらべる 同ト 枕 士 ひとあやふくうらべるくいあるぬや 和泉式部集 えうそあやめぐ

うらべる

源 桐壺 あやけの御うらををうるあんゆくきだめて 又 東屋 とぐある

枕 三 狭 三 うらむる

うらめる

源 若紫 うらめるけゆ思へうらべ人もいるあらん

うらめる

後撰 恋二 別をい悲しき物とうらべかどうらべ

見ゆるかあるうる宿ゆひとり見ゆるぐ 宇 国譲上 下 薦ゆ待るぐ

うらめるけるぐ 枕 三 わくのうらめるらんよ

うらめるあれ

うらめるあれ

落窪四 うらめるあれゆ意同ト 兼輔集 出たるぐ

うらめるあるくある人よめぐりゆるるて見るぐ受領の

うらめるあれ

うらめるあれの交まてうらやるをいふ

安らゆ思ゆ

ゆる哉

うらもぐだう 筑紫 俗

虫名、蟾蜍ゆ

同ト

五穀を精げ又物を舂て粉を造る器あり

又碓磨等あり 記 中 曾能都豆美宇須途多

うる

亞々 和 臼 名宇須

春穀器也

うる

後拾遺 春上 薄墨ゆかく玉章と見ゆるかかるるるかるが絲

源 竹川 秋いひうるゆるるるあと 夫四 山のそるうるるるあの花ざるり雲よゆぐ

濃くあるをいふ語うるるをうるるあるうるゆるるの類皆色ゆ冠らせるいへり

いぬ春の暮○又厚くあつぬをいふ語にうすぬうすぎぬうすぎぬのうすぎぬの類物に冠らせていふ 源空蟬 かのぬぎすべしたるうすぎぬをとりていで給ひぬ 頼政集上 我が身やうる河水のうすき氷ゆるゝ清き流あまでも○又淡く薄きをいふ髪鬢あるありうすぶうすきうすぶりあどたあびき覆ふ物ゆ冠らせていふ 源蜻蛉 入日さすさ峯ゆ立あびくうすぶるあり 千載秋上 秋山の麓をうすぶるうすぎぬいふ裾野の萩のすぐれありけり 師尹千首 夕づくひきやをうべのうすぶるをそもとも分うぬ春の色うゐ 後鳥羽帝御集 うすりける世ゆをそがあのうすけぶり絶を絶をを物思ふころ○又食味ゆる冠らせていふ 庖丁聞書 うすうすゆく煮あり青みを入へ

## うぞ

佐勢曽能古 万十九 島山ゆ照もるたちばなの花の上ゆ挿ゆ飾あり 推古紀 唯元日に着髪華髪華此云于儺 記中 久麻加志賀波表字受介さゝらへゆるいすゝぞそなるたち花字受ゆ

## うぞ 音

唐鞍を用る時馬の鞍後ゆ着る飾あり 和 雲珠 字須

## うすらる

織物の名あり厚板ゆむらくていふ板あるのゝ薄きをいふ 大閤記 妻子の衣類一万石所持の士い京染等の小袖五千石より下い薄板○又俗ゆ花瓶を居置板の名ゆいふ

## うすもの 俗

あり須四ゆ〜て白の如く實ゆ稜あり

## うすいろ

織物又淡紫色の名ゆいふ 遺裝 薄色經紫緯白又浅色もあり或い二藍色薄をいふ

## うすいろ

夫卅三 たそやめいういもぞ結ぶうすぶうすぶ色の薄きを夏のあるゝとや見ん○又重の色目ゆもいふ 雁衣 表薄花田赤ゝを少〜過ぎぬ〜裏濃き薄色至卅餘人着之

## うすぶ クシキ

色の濃からぬ、物の厚からぬ情の深からぬあるをいふ

## うすぶる

うすらひの宇須岐ゝをうすぶるゝあるゝもあるゆけるかなゝゝのいろいうすぶるまでど秋いうすぶるかなゝ 方二 さわかゝゆ氷ゆるる 古今 秋下 さわ山の

## うすぎぬ

帛属、紗をいふ 以字 紗ギヌ○又薄き衣をもいふ 増鏡二 白きうすぎぬ衣ひきをり

## うすぐも 俗

介名、蚌類ゆゝて楕圓大あるも二寸ゆ足らずも白質ゆ黒斑あり

## うすこうはい 俗

河魚名、形鼠頭魚ゆ似て青黒脇腹ゆ赤條あり下野ゆあいさと呼者是あり

うぢざくら

袖中抄四 霞たち鞍馬の山のうぢ櫻 櫻心うり碎辨二三葉を出て其色淡紅あり

續詞花春下 うぢざくらとのゝうちを人のもてゆくで来うけもぶ

うぢざくらさくさくさく花 重色目あり 滋草拾露 雜事抄

狩衣色薄櫻萠木面薄青裏櫻

うぢく カキツケ

うぢたちはしる 源朝臣 さむげなるけうひうぢたちで来て

うぢたちする ウリルロレ 群書集うをいふ 記下 公波須受米

宇受須麻理韋已

うぢだゝこ 春夏用ゆるたゝこあり 齋宮式 緑端帖十帖

已上秋冬料 春夏料亦如是但爲薄帖

うぢのき 俗 灌木名、高三四尺葉卵圓ゆゝて互生せ長

さ寸許三四月葉間ゆ淡紅小花を開く形

どうだんつゝじの花ゆ似うり花後實と結ぶ

小豆の大ゆゝて味酸し葉味亦酸し

うぢむ 老人の歯うゝゆあゝて臼の如くありたるをいふ 和歯 日本名宇須波 老人歯如臼也

うぢむ 俗 庵カの精好ゆゝて

刄の薄きをいふ

うぢゝく カキクケ

地止宇須波

使坐止世

祝 祝詞式 遷却凶神 山川能清地 遷出坐氐 吾

うぢゝくゆ同ドせのしゝの轉ゝるなり

うぢる

の霞たちきる春の野べかな 夫六帖五 さやひめのたうかゝゝたうぢる

衣ハ夏きてる春のかけつゝを 夫廿三 うぢゝくゆ同ドかな

うぢびゝひ 冠の名ありその低きをいふ 逍遥 天子

御冠薄額云々臣下少年薄額

うぢべ 鳥名、ゆゝゆ同ト 鴉鷺物語 鞠小太郎

田中高聲其勢多ゝと雖人がゝからぬ

うぢべう 雞ゆ同ト 下學 雞 日本三木雞附 鳥或云倭邊鳥

うぢべう 箭羽あり真羽の薄ゝして黒き所の少を云

平家十二 廿四 さゝるうぢべうの矢わ

うぢべり 俗 端 端を著る

席をいふ

うぢゆ 越後 俗 虫名、蚤ゆ

同ト

うすめ　鳥名、おほくどりに同じ
以字 護田鳥

うすもの　紗又羅をいふ 枕十三 うす墨の衣うす物のけさなど 以字 羅

うすやう　やう 音　紙の名なり鳥の子の如くにて薄きを云 又雁皮紙に似て薄く謄寫に用ゐる紙を
もゑぎ 源明石 そのうびんのとのへふ あまびゐるうすやうに 新六六 散とこ
かさねし持たる後までもそのめにつけし櫻うすやう

うすら　うすらかに同じ 清愼公集 初雪のうすらに降る庭の面に踏見ん事もあたらしき哉

うすらか　うすらかなるをいふなり 枕八 雪のいと高くはあらでうすらかにふりたるなどは
うすくたりけも 宇拾二 うすらかなる刀の
あかやかなる云々此芋をひきつつ

うすらぐ　ガギグゲ　うすくなるをいふ 源榊 たちこえたうし馬車うすらぎて 永久四年百首 あづまやの軒
のたるひのうすらぐは雪も消
けて春やくらん

うする　セシスセ　ある物のなくなるをいふ 万十二 久かたの
天つみそらにてれる日の将失日こそ

ゆひやまめ 源帚木 此奥うせなん時に立よりたまへ 宇拾六 紙も同じ如つつ
へどうせる事あらで○又人の死するをいふ 神代紀下 朋友喪亡故吾即來
弔如何誤死
人於我耶

うせる　レ レ ル ル　うせくなるをいふ 曾丹集 うせぬるがころもうすてて見えしよりたちをも孫せじと思ひ
そめてき 夫木廿六 けふよりはあしたの水やぬる
かるらん春のたちどの氷うせれて

うせうと　古節 失人　逃失する人をいふ

うせもの　俗　失せたる物をいふ

うそ　獣名、獺に同じ 大草相傳書 うそとや兒候と
き石を二つ三つ火にくべく○又鳥名、其
大き雀より大にして頭真黒両頬より頸に至て深紅觜短く黒し背胸
腹及翮灰青微赤を帯び其尾黒し 下學 鷽 類聚往来 鶮○又嘯を云
竹 あるひは声ゆうがをしあるひはうそふき扇を
あらしなすうそるに○又俗に妄詐をいふ

うそとり　うそひめ　俗　并に鳥名、うそに
同じ

うそぶく カキクケ

口を蹙めて音を出すをいふ 神代紀下 風招即嘯也 更科日記 ふねをいだす 舟を出さぐうそ

ふのてをゆひ〜〇又轉じて詩歌あど吟ずるをいふ 源竹川 紅梅の木のもとに松ぞうえたりける

うそぶく マミムメ

笑顔をもつくるをいふ 愚管抄四 花園左大臣ひとりうそぶくと揖して

うそむく カキクケ

うそぶくに同じ

字嘯 宇曾年久

うた

聲を出してうたふものゝ総名あり但し中世以来うたふとよむとの二種に分れたり

うたふものゝ神樂催馬樂の類あり後世一種の文藝となれりうたは一句五言七言の定あれども或は六言八九言に至るものあり長短も亦定あり然れども後世三十一言を以て常格とす 記上 余作御歌其御歌曰夜久毛多都伊豆毛夜幣賀岐都麻碁微余夜幣賀岐都久流曽能夜幣賀岐 古今序 此歌あめつちのひらけしはじめ舞あどもるかと 枕四 うたうたふものゝ中に優劣を競ふ

うたあはせ

歌人を左右に分け對あはせ優劣を競ふをいふ 源東屋 うたあはせ合

物語かるたを八雲に内裡歌合天徳四年永承四年承暦二年以此三箇度爲例

うだいし 音

右大史あり文書勘例等の事を掌る官なり左大史の下併せ見るべし

うだいぢん 音

右大臣あり左大臣の下併せ見るべし 源桐壺 一のきみは右大臣の女御の御とぢ

ゆき 職原抄上 右大臣一人

うだいしやう 音

右大將あり右近衛の大將をいふ右近衛の大將中將少將の級あり左大將の下併せ見るべし 職原抄下 番長云々 左右大將必召使之

うだいべん 音

右大辨あり大政官中の官なり大辨中辨少辨の級あり左大辨の下併せ見るべし

源桐壺 御とぢろにぞもてつかうまつる

うだいべんの子のやうなるもせて

うだいぶつ 信濃 俗

樺皮をいふ鷸鷸を從ふ人兩中に火を點し松明とす故にいふ

うだいも 俗

菜名佛掌藷に同じ

うたくしき シクシキ

うたくしきをかくるとかくるとかくるの意あり 万十六

あらき田のあらき田の稲を倉につくるあり

于稻于稻志ろぐ
ろ〜ふ〜ろ〜ふ

うたうろひ

がらうたうろひと○又山城淀の
魚名い〜ぶ〜をろふ

うたうら〜

歌を以て吉凶を占ふをいふ 春日驗記八つ
めどもかゝるも物い夏虫の身より餘るる
恩ひありけりといふ歌占をいふ 十訓中 心中
所願占へと有けるとび歌うらふ

うたがた

男女立騎て歌かゝる古の遊あり 武烈紀
果之所朝立歌場 歌場此云 宇多伎岐
草名、井麻ふ同じ 本和 井麻 和名 乃阿之久佐一名宇多加久佐

うたかぐさ

水の上の沫あり 和 沫雨雨潦上沫起若覆
盆 加名宇 本加大 後撰 慶五 思ひ川たえも流るゝ水の
あわやと 又 慶五 降やめば跡ぞ見えぬう
たのむかな○又あやふげなるなげあるる
ひつゝもあるるうるゝ〜あるべつらふと
○又轉ドとちぐ〜ちぐ〜あどの意あるる云

うたかる

あるのうるた人ふあるときうたの人とる
たるのきくくちあれ世をたのむかな○又あやふげなるなげあるる
義ゆるひつり 万十三 歌方ゆるひつり
おちゝどちらふけなち〜○又轉ドとちぐ〜ちぐ〜あどの意あるる云

うたがるむろのき宇多
我多ゆ久〜き時を過ふけるかゝる

うたがる〜き

疑ふべきさゆをいふ 十訓九 ちべ〜慈悲ゆ
刑のうるべ〜きい輕ゆ什べれの由
疑い〜れ事をいふ又惑をいふ○疑 万四
赤ちゆのうゆる馬柵のちゆゆち〜妹ゆ心い

うたがひ

物のた〜ろあ〜ゆるつれてちれをいるゝと
思ふをいふ 確畧紀 即猜兄等 万十三 得田價

うたがふ

累ろろいふぜ〜ことぞかう
ろせちぐせこあるる時ぐふ

うたがるた 俗

小き紙牌ゆ歌の上下句を分書〜下句の
牌を撒上句を讀ゆ隨て下句を取弄器也
虫名、促織ゆ
同ト

うたきりぐ〜せ 東京 俗

歌の作風をいふ 乳母草子 其御うるぐちい
いるぐあど申つるぐちや○又轉ドるる歌

うたぐち

まむ事の巧あるるいふ 東國紀行 座主果守僧正能書歌口
ゆるおちゝけむ○又横笛の吹處の穴をいふ

うだく　カキクケ

ゆ持つともいふ漢字の懐の意あり　神武紀　懐憤對へ

うたぐる　ダグダルグル

安坐もたをりふ又倚子ゆらゝかるもいふ　天智紀　踞坐胡床　以字　跏趺

酒を飲を遊びて思をうちあげ樂をとりふ　安康紀　讌于新室

うたげ

くたりてゆ同ト　古今　諏諧　花と見てをゝんとしれば　ゝゝあへゝ　うたゝゆるさすの名ゆと

うたゝ

そあうけを　源手習　例の人まてゝいあらゝとうたゝ

ある中で世をうゝを侍るめをゝび

うだち

梁の上ゆ立つる柱あり

和　梲　和名字　太知　字　枘　字　太知

うたづゝさ

雅樂寮ゆ同ト　源　胡蝶　うゝつゝさの

人めゝて舞の樂せらる

うたて

轉進ゝて愈甚しくあり行意あり　万十三　のゝいあも戀ひをもありといあゝゆゝゆゝ得田直

此ごろ戀の繁きゝ　源　葵　うゝて

あゝぬ善かゝぬ意ゆもいへり

所せうゝあるかゆ○又轉ゝてい世の常

武烈紀　設奇偉之戲　記下　字多呂物刮玉故

應慎　源　若紫　老まゝちかゝつる

時いうたて侍るを

うたあゝ　クイキ

鬚あゝあり　著五　天の川汀うゝあゝまさ

るかあいゝゆゝつゝん　鵲の橋

歌ゝむ題あり　字　嵯峨院　うゝの題ゆかゝせ給

てさゲの院ゆ奉りたまへ

うたのだい　だい音

雅樂寮ゆ同ト　字　奈使　うたのつゝさの

樂の近く聞ゆるかな

うたのつゝさ

中古以来のうゝひ物あり内外各百曲別

ゆ十番の曲等あり其音節も流派數多あ

うたひ

り　年中定例記　御會所まて一番の

番の番頭一獻被申

觀世大夫同　四郎祇候ゝゝうゝひと申候也

うたびと

歌を巧ゆうたふ人をいふ　万十六　歌人とうをめもらのや笛吹とうをめもらのや　職員令

歌人三十人○又ゝるまゝをるゝ

あまゝの題よゝせ侍　袋草子二　次歌人應召参候

うたふ　ハヒフヘ

聲を揚げ節をつけて歌を唱ふをいふ

いるるけゝゝつゝい朝ゝゝし　孝德紀　乃授御琴而使唱　万十九　朝ごとゆ聞

土佐　うたまゝうゝふ舟うた　うた

ゝゝ唱船人

うたぶくろ

作法あり 夫五 のぶくろゆ鳴や蛙の歌袋

檀紙ゆて方ゆ折り水引を穿通し柱ゆ掛置て歌の詠草など収置物あり又錦ゆて

うたふる へフルフル

欲せる事又欲せざる事を上ゆ訴上るを いふうらへ同ト 万十六 このごろの我と ひぢかちたぐ〳〵ぢびとづ〳〵 ぢすぢ〳〵ぢすぬ事い誰ゆういうらへ申候うん 将訴 宇拾六 我を

うたへ

訴訟をいふ

うたへうぢたつうさ

訴訟を正し罪人を刑省あり

うたまと

和 刑部省 宇多倍多々須 都加佐

歌を作人をいふ又歌よむゆ巧ある人をも いふ 大和上 あおおもしろの玉のうたまと

やとあむのさゆふ 宇拾八 敏行とのふうるまうん

元真集 春筑紫まて歌まゝあまうて

うたまもぎ 俗 やなきよもぎ

草名、葉柳ゆ似て微もあり夏初莖を抽る事一二尺莖梢枝を分て十數花攢り着く

形藁蒿ゆ似て小く淡黄色後絮と

ありて飛ふ○蓬

うたゆまつら

かくるとそろ〳〵あどとゆるら

うたまつらよくあおいまうまつ

舞樂音曲の事を掌る寮あり

和 雅樂寮 宇多乎止比 乃豆加佐

歌よくうたふ女をいふ 職員令 歌女

二人 以字 倡女 ウタウタヒ 天武紀下 是日詔曰

うたよくうたふ男をいふ

元諸歌男歌女笛吹者

うため

外ゆ對へくりふ地又物の中をいふ 記上

うたを

白言從此以内不得選 万三 大宮の内やできる

うち

うちあびきもとあどろのあるあ

新古 神祇 神風や玉ぐしの葉

を取うざ〳〵うちうの宮ゆ君とそのを

そのを○又内の義より出て禁中をいひ轉

しそ至尊を申也 源 帚木 内ゆ

宮一院后宮つぐ〳〵のゆかり 枕

又 若菜 内春

き意あり 万十三 をとめらぐうう

旅衣ゆ

うむうぐあ〳〵ゆ戀渡るかも

枕二 内ゆうあとやぐとあぐる○又美し

うち

詞の上ゆ冠してのふ詞して添言をいふ其事をつゝく言へるあり 十訓抄二 大方うち

あらん人もあらけをさらしとものべて　源帚木本の書の時代のあらえうち
あひ　万三田子の浦由打出て見れば真白ぞふじの高嶺に雪は降るる
源宿長うちきて耳をとゞめあらえ　拾愚貞外かゝる衣もがな
道も立かねうち散るを雪野風さむけ

うぢ

部造三十八氏　万廿大伴乃宇治と名ふ
かくるゆたらちめとも

姓氏録起藤原朝臣盡猪名

うちあいせ

内合せの義ゆて脚の脛の内あり

和腿和名宇知阿波勢

うちあいび

石決明の肉を薄く剥て打展しをとるを
中古禮式の者は用ゐ来る　世俗立要集うち
ちあらび　宗吾大草紙上　あらびの尾を左へあるべし
奉公覺悟記うちあらびをひらきをといふあり

うちあふび

うちあらびは同ト　大草相傳聞書うちあ
ふびの前の二ぐんめを御口ふあて

うちあこ

撒網　晴　あるある人々へあちぬぐあ
うのぐをくちあるをるわどふ

うちいる

地上は着坐をる時の敷板あり

以字打板給政官外記首所板

うちゝ

やんちゝあれあうの
うちゝのもてあゝ

うぢく　俗

鄭躅　躅て行かゝ保又立
かゝるとのふ

うちうべん　音

右中辨あり右大辨の條
併せ見るべし

うちうこ

をづくをは同ト　以字湖　○又外は嶋山
繞りをる處の海をる俗はうちをこと云

うちうら

褥あるの裏は附る帛をといふ　雅裝上うちう
ちつけをるをあをちちを附をう

うちえび

庖丁家の名目あり　庖丁聞書打海老の吸
物をは生まて皮をむき葛の粉を交てをう
板の上にあるを俗やゝうどんをと
打ごとくして

うちとゝぜ　俗

魚名、あをうちをは
同ト

うちがね　俗

介名、のをぐねは
同ト

うちゝ

あらはあらぬをといふ表ぐぬ義あり
うちゝは思給へるをもをと奏しをもを　源桐壺又帚木

うちかけ

衲襠将軍帯 和 内襠 和名抄 知加介 ○又市の名おいふ 四時祭式 帔一條 ○婦人衣上ゐ被とも俗ゐうちかけ又かけと唱ふ

武官大儀ゐ用ゐる服あり胸と背ゐ當て着も袖あり 衛門式 督著武禮冠深緋襖繡

うちかけよろひ

武官の儀仗ゐて飾ゐ着る鎧あり 兵部式 凡諸儀所須器仗者云々其挂甲者預申官鑄附ゐる刀と云即今の世の刀あり太刀とゐい異あり 平家十九 六彌太ゐ郎等落合

うちがゝる

て打刀と以て忠度の弓手のかひなを盛衰 赤地の錦の直 出ゐ白金物打ゐる黒糸威ゐ打刀前出ゐさて

うちがひ

泉河下る小舟のうちがひゐ浅瀬ぞ多る紀 新六三

かれおやこつゝ○又細く造りたるを云

うち違つゝ帯ゐるまりのこ

うちがゝ

氏々ゐゝく祭る祖神をいふ 續紀 世四 叙其氏神鹿嶋社正三位 續後紀 三 山城國葛野郡上林郷地方一町賜伴宿祢等為祭氏神處 大鏡 七 春日明神とあらはゐ奉りくいつゐ藤氏の御氏神ゐゝく○又俗ゐうぶすなの神をいふ

うちき

婦人の上ゐ被る服あり 源 木槿花 かしらつけの髪のかゝらいしもうちきのちそゐたりゝく

枕 四 后のおちゝ〜やゝ後ハ裳もきそうちき

なりかゝゝゝく 和 袿 漢語抄作褂 云宮知波

うちき 俗

折ゐ同じ 物称 出羽ゝそ

うちきゝ

うちきゝ聞ゐる歌を記し置く集をいふ 枕 十

うちきゝ

うちきゝあどゐゐめらるゝ 十六夜日記 續後撰より寸つゝ紀二ゝび三

ゝひの家々の打きゝゐる歌あゝゝ

うちきぬ

婦人ひとへの上又あゝめの上ゐ着る服ゐ 女官飾抄 うちきぬの事紅の綾を打て

かゝ孫ゐを候ときあい人の濃きうちきあり 雅装 うちきぬい上ゝそ下ゐなゝ

めとかゝ孫其下ゐひとへを重ぬる事あり

うちぐ〜 加賀 俗

虫名ゝゝゐ

同ト

うちぐもり

上下ゐ青紫の雲と漉出せる鳥の子紙を

出質黄白ゐ〜て紫色の紋脈あるいふ 古節 内曇○又俗ゐ砥の名、山城鳴瀧ゐ

裡ゐ黒斑あゝゝとゐふ酒盃ゐ用ゐる

うちぐり 俗

乾栗と蒸し沙糖と加へ紙と隔て敲き扇めゝる者とゐふ甲斐の産あり

うちこし
連歌家の言にて去嫌(サリキラヒ)の名目なり [きらひ言]
前の句の心にてうつりの一字をも捨ざるうちこしを

うちしき
物に敷く布帛なり [字 次上] あやかくかう
そうのかざり絵てうちしきゆし [源 総角] うち
しきは青地のこまのはしき [枕 六] とうだいの
うちしきをふきてたてるに

うちむしめ ㊗
虫名、燈蛾(ヒトリムシ)の雌なり形蚕の蛾の雌に似て大く翅灰褐色腹深紅にして臙脂(ベニ)の如し
雄ハ形小し皆諸木に生ぜる毛虫の羽化せしものなり

うちたれがみ
結び上ざる髪をいふ [拾遺 夏] 時鳥をち帰り
なけうなゐこがうちたれ髪(ガミ)の五月雨の空

うちつくに
畿内といふ [崇神紀] 畿内(ウチツクニ)無事
[成務紀] 中区(ウチツクニ)

うちつけ
ふとうちみたる程のさまにて深く心を用
ゐぬ又たちまちの意にもちゐるなり
[後撰 冬] 梅がえにふりおける雪を春近みめのうちつけに花かとぞみる
さしあたりて見るうちつけのきびしさなど [源 帚木]

うちつみや
天子の後宮をいふ [景行紀] 亦形姿
穢陋久之不堪陪於掖庭(ウチツミヤ)

うちで
儀式に簾の下より衣の端をいだすをいふ [雅装 上] うちでのまゆうつ紙のごとし五せち
所のうち出まれはうちぎぬしうらゝきぬの上にかさね
みくあるおりはまるひでてそへいふ也

うちでのこづち
古き諺にいへる寶の名なり [寶物集 一] されば
人の寶にはうち出の小槌といふもののこそよ
き寶なれ侍りけると云々馬牛食物衣物など
心に任せてうち出しくあるらんこそ

うちでのたち
用意に取出し置大刀の義なり [今昔 廿] 大郎助
物食ひ畢て高枕にねぬる枕上に打出の大
刀置たり傍に弓箙鎧甲あり庭に郎等共調度を
負て所々に立廻りて主を守る

うちとけ
心うちとけてつゝみなくふるまふうちとくるの
體言なり [枕 五] おくのかたにうちとけごとと云
ふをせらせらぐ [蜻 四] 簾のもとにうちとけたるさまにて見るに [源 末摘花] う
ちとけすぎたりのいさゝかもおくらず [又 浮舟] おゆるは其女どちの中にかたらし
たらんうちとけふるまひは
御らんぜんとのたまふ

うちとねり
官名うどねりに同じ
[和] 内舎人 宇知止祢利

うちどり

内取御装束 大月廿六日小月廿五日於二壽殿東庭行之 思のまゝの日記 廿日

あやまり内とりの式いとおもしろし

うちわすらし

御前ゆめ〳〵て御覽せんうちあらし

うちならし

扇くゝして形曲もる銅器あゝ樂ゆ用ゆる

原いあゝ作りしあり 和磬 和名宇知奈良之

うち祢 俗

短く太き箭すして敵ゆ

擲つ兵器あり

うちのおとゞ

次條ゆ同ド 百寮和歌 内大臣 冠をゆるゝ人

や其かゝの内のおとゞの始ありけん

うちのあわれこ

内大臣あり天智帝の時藤原鎌足始めて

此官ゆ任せらる此時ハ左右大臣の上ゆ

位せり後中絶して光仁帝の朝藤原良繼復此官ゆ任ぜ此時より左右の

下ゆ列せり然るゝ令外の官ゆしてそこもを員の外の大臣あゝ称せり

天智紀 天皇遣東宮大皇弟於藤原内大臣家授大織冠于大臣位 百寮訓要抄

内大臣つかさどる事任人大畧右大臣ゆ同ド

うちのかしいでのつかさ

凡て進御の食物を掌る司あり

和 内膳司 字知乃加之波天乃官

うちのかしいでのつかさ

内膳司の長官あり 續紀 九 是日勅准令以高

橋安曇二氏任内膳司者爲奉膳其以他氏

任之者宜名爲正 官位令 内膳奉膳 職員令 奉膳

二人掌惣知御膳進食先嘗事

うちのかゆそりのつかさ

内掃部司の長官あり掃部寮の下併見る

席薦簀簾苫鋪設及蒲

べし 職員令 内掃部正一人掌供御牀狹疊

龍葦等事

うちのかゆそりのつかさ

大抵掃部の司ゆ同しく但宮内の被管ゆ

て内を掌るを異こもを 職員令 内掃部司

うぢのかこ

諸氏の中ゆて宗家こる者を氏上こゝ

其一族を掌らしむるをいふ後世の氏長者

こゝをより出こるあり 天智紀 三年春二月丁亥天皇命

大皇弟宣增換冠位階名及氏上民部家部等

うちのかもりのつかさ

内掃部司ゆ同ト 官職難義 職員令ゆ載ら

主油司内掃部司あと申候今あもこる官も其後減少の官多くあり云々

官此外ゆ猶侍りし

うちのこもりのかこ

内藥司の長官あり 職員令 内藥正

一人掌供奉藥香和合御藥事

うちのくすりのつかさ

管ある 職員令 内薬司

大抵典薬寮ゐ同じくして藥香の外別ゐ侍醫四人を置き診候ゐ備ふ中務省の被

うちのくらのかみ

内蔵寮の長官あり 職員令 内蔵頭一人掌金銀珠玉寶器錦綾雜絲氈褥諸蕃貢獻奇瑋之物年料供進御服及別勅用物事

うちのくらのつかさ

天子内帑の物を掌る寮あり前條併せ見るべし 和 内蔵寮 宇知乃久良乃豆加佐

うちのくすり

うちあるべゐ同じ 宗五大草紙上 うちのくすりあるべゐ、あらびあ折敷のくすりゐ切へし

うちのあるをつかさ

中務省被接の官にして大中少の三級あり詔勅宣命を造り又記録する事を掌る 職員令

大内記二人、云々中内記云々

少内記 和 内記 宇知乃之流 御豆加佐

うちのそめものかみ

内染司の長官あり 職員令 内染正一人掌供御雜染之屬

うちのそめものつかさ

宮内省の被管ゐ〜て供御の綾帛を染るを掌る 職員令 内染司

うちのたくみのかみ

内匠寮の長官あり 職原抄上 内匠寮云々頭一人

宮中の雜器を造り齋院野宮等の裝束の事を掌る寮あり神亀五年新ゐ此寮を置

うちのたくみのつかさ

を〜うり 和 内匠寮 宇知乃多久美乃豆加佐

職原抄 内匠寮 令例 軒

うぢのちやうおや

氏々の中ゐて長たる人を〜氏上ゐ同じ〜後世まい王源藤橘の氏ゐの〜

此號を賜ふ〜〜あをり 類史 四十 凡貢氏女事云々今須氏之長者擇氏中端正女貢之 今昔 廿二 二郎の大臣の御流ハ氏の長者を繼て

うちのつかものつかさ

内兵庫あり御料の兵器を掌る 令集解 五

料設者 朱云非常事内外二處設者或云此司爲御

うちのつかものくら

内兵庫を司る長官あり 職員令 内兵庫正一人掌准兵庫頭

うちのとねり

内舎人ゐ同じ 百寮和歌 内舎人 ものゝふのいきあひのあるあり生ぐ〜内のとねりやゐ

らひそむ

らん

うちのゐやのこと　内禮司の長官あり職員令内禮正一人掌官内禮儀禁察非違中務の被管ふして宮門以内の禮を掌る職員令内禮司

うちのゐやのつかさ　竹の骨ゐ紙を貼るも蒲葵の葉にて作るもありて皆暑月ゐ風を招く器あり

うちい　和團扇字知波宇國葉いとあつ〳〵とのゝふへいうちいもまゐらせんとゝく〳〵公任集うちいの名ゐさうびきんとゝいふ事ようせ給ひけるゐ

うちたち〳〵　假ゐかけたるを搞をいふ神代紀下又於天安河ゐ造打搞方十たちのゝふを木もて来んために源夕負うちたち〳〵

うちたん　打延の意ゐて物の長き事の久〳〵ゐとゐゝり古今秋上咲そめ〳〵時より後いゐ

うちたち　世い春ゐまゐゐ色の常ゐる

うちたちひ　枕五雨のうちたんゐるこゝろ

うちゆひ　丁字形の杖ゐ布を纏ひ着て塵を拂ふ器あり江次七上卿取打拂宮進神殿戸前撒散して神を祭る米の名あり宇藤原君そちゝもうちゆひゐよ紹りゝべ源横笛

うちゆかする　セス　ゼ　ゼ　事物の尋常又大抵ある意なり宇拾四此病のありさまをうちゆかせる事ゐあり〳〵

うちゆかする　山家下けゝをいあやめゝ〳〵大豆を少く煮て乾し槌を以て打うちゆかせていのちゝとゝ思ふ

うちゆめ　扁めたるをいふ慶節扣菽

うちゆゐり　参内はるをいふ源竹川内ゆゐりより外のあり紀あどうひ〳〵〳〵ありあて侍きゝび

うぢゆする　鰻鱺の鮓又乾しるをいふ共ゐ山城宇治の産あり故ゐいふ庖丁聞書うぢゆするとゝ

いふいうあゐのゝ〳〵あり大草家料理書宇治九かゝゐやきの事ゐゐふりて後切るあり

うちこ　庖丁家の名目あり厨事類記鯉い先下ゐ搔敷の實作り重てゐる次うちをか引を世俗立要集ちゝめの一ちんらゝげうちあちびゐて次うちを

○俗ゐ身體を打て激たるをいふ○打撲

うちこだりのこと　いふ〳〵手ゐを納るをいふ中古ようう種々粧の具を納るあり和巾箱云々盛

手巾之器也 俗云、すり箱 源 繪合 御ふくのもとゝ香壺の
ふたゝ 後深草帝御記 すり亂箱其箱盛櫛二枚
介名、紫がひゝ同ト○又筑前ゝ云ふ香爐
の鹿肉共ゆ紫ある者をいふ

うちむらさき 俗

すり鍛へたる義ゝて刀鎗あゝど兵器の名と
あるなり 盛衰 廿九 此巴と云女い云々方
○又銅鐵ゆ拘らず金ゆく打
類聚雜要 四 打物鍛冶熟銅廿一両○又布帛ゆ
宇 初秘 御紅ゆいふたのあゝどゝ〜所の
ゆ〜ゆ〜ぬひりのあゝと○又俗ゆうぐんふゆ

うちもの

矢取ゝもうちもの取ゝもゝ
ち造り出せる器をもいふ 類
と槌ゆゝ打ふるゝをいふ 宇
榮 殿上の花見 かゝるものゝうちものゆ
沙糖を雜へ摸ゆ入て打ふる食物をもいふ○又音樂の
鼓類をいふ 盛衰 七 盛定行家い打りのを仕りき

うちろんぎ ろんぎ 音

正月御齋會の結願の日御前ゆく佛經の
齋會のうち論義いをゝ
論義をもいふ 水鏡 下 同四年正月ゆ御
御齋會終事内論義事
年中行事 秘抄 十四日

うちうてうこと

此所ゝ彼方を見ゝをもいふ 記 下 宇
知和多須夜賀波延那須 古今 旋頭 うつうこと
もをちかゝる人ゆのゝゝ白くたゝるゝ何の花そ
も○又世の中ゆ廣く度りをの意まるゝ 源 宿木 うちうてゝ世ゆ

物をもてたゝゝあるをいふ轉ゝて人を
殺ゝ國を攻るあゝどをもいふ 記 中 久夫都々
ゝ夜麻牟 記 下 佐々婆介宇都夜所良禮能
景行紀 或伺農來以略人民擊則隱草 万 十九 かゆかゝゆ物い思ちどゝる
人の打墨繩のたゝ一ちゆ○又假屋をかゝ幕あゝどゝ扇額をかく
るあゝどをいふ 宇 吹上下 あゆゝゆ舞臺ゆひあげゝどゝ 又 藤原君 加茂の
川邊ゆさゝきうちて 十訓 九 彼師かゝあゝる額あゝとてえり出さを
ゝをとゝうゝをゝゝゆ○又碁双六あゝど勝負をあゝをゝをいふ 順集 古
近少將義孝朝臣と加賀掾橘正通と圍碁ゝちゝ 今昔 四 只今ゝゝゝひ
あゝく碁を擲たゝをゝゝきけゝゝ 徒然草 上 双六の上手といひゝ人ゆ云々
かゝゝんとゝうゝゝゝをけゝゝ
とゝうゝきあり

うつ

中の空虛あゝをいふ 記 上 内剥
鵝皮剥 神代紀 下 作無戸室

うづ

高く嚴ゝき意ゆく物を稱賛ゝる語あり
帛 子 稱辭竟奉 久 登 宣○又形の 神代紀 上 珍子 珍 上 圖 云 祝詞式 祈年祭 宇豆乃幣
鴟門の宇頭之保ゆたゝをもかゝ 堆きをもいふ 万 十五 ゝをもゝゝの名ゆあゝ
ゝをもいふあゆをもめゝゝ

うつあ〜

うつぎ

けるうりけり 本和 溲疏 一名巨骨和名宇豆岐 勝ゐ似て両對そ六七寸の穂をあ〜と花の淡紫紅色又紅又白あり後小き角を結ぶ ○又俗ゐ錦帶花をもうつふ上畧名あり

うづき

うづきだゐ 伊勢 俗

四月をのふ 万十九 うのはなを霰四月〜立ば よどのゆゐ鳴ゆと〜ぎすを

木名、石楠ゐ

同ト

うつ〜

愛〜きの體言 万四 ものゝふの八十伴のを と出行〜愛〜夫い 又廿 あめつ〜のうれ

うつ〜ね 又十二 月をまつ國

謂易子之一木乎 齋明紀 于都倶之枳阿餓倭柯枳古弘 万五 さき草のゐかゐを祈んと愛久をうらへば 枕三 い〜〜うつ〜ねらぐのうち

愛をもべねをらふそれより出て美なるを細小あるをいふ 記上 愛我那迩妹命乎

うつ内ゐ〜足の屈む處の内をいふ

字 國曲脚中也 字頭阿志 木名うのはゐ同ト 曾丹集 うつぎ原て うあが布をさらせると見え〜い花のさ

○又灌木名、高數尺ゐ過ぎて葉土牛膝ゐ似て両對そ六七寸の穂をあ〜と花を生ず錦帶の如く〜て小〜

○又俗ゐ錦帶花をもうつふ上畧名あり 本和 楊櫨木一名空疏 和名、宇都岐

ぎくひたる 又四 物のふうあと山

うつ〜〜作りて

うづくまる

ゆりゐ

うつらる

ひ〜

ろを

うつげ 土佐 俗

灌木名、溲疏ゐ

同〜

顯ゐ同〜現在の意又慥なる意ゐ云へり

うつ〜 記下 恐我大神有宇都志意美者 万十二 うつせみの宇都思情も我いあ〜妹をあひ見まを年のへぬまば 源榊 うつらとも て ちうめ給ふ御心皆うつ〜ざるあ〜を ○又移

もの體言色香を物ゐうつ〜るとをいふ 万八 秋の露い移ありけり水鳥の青うの山の色つくるまで 又十三 うちひさを宮まいあれと月うつの移情いうつゐ 源白宮 うつ〜とまろづのをづまてうつ〜とまめたりへり ○又轉ととのりがへの乗をものをいふ 字 初秋 ひとだまひゐ

つきゝ人のりてのぼりたち給ふ中將うつしにのりてうちの中へちかうまひてたつ【増鏡三】右大將のかちりぢみなてうつしの馬をひかせらるとぞ○又摹寫摸造しくる物なるをいふ

うつしぐさ ㊗俗 草名、鴨跡草(ツキクサ)におなじ 鴨跡草(ツキクサ)の花を摘、紙に移し置て染料に用るなり【桃蹊】鈍色移し花にて染るなり○

うつしぞめ 又筑前まそん鴨跡草をいふ

うづしほ うづまく潮をいふ【万十五】こゝまやこの名におふなるとの宇頭之保(ウヅシホ)にたまもかるてふあまをとめとも

うつす サ|シ|ス|セ| こゝもとかくもに移しかくもをこゝに寫をなど 遷(ウツシカヘ)移又撲(ウツシトル)取などをもいふ【孝徳紀】所壌丘墓及被遷人者賜物各有差【仏足石歌】さるのとおとのみに宇都志於役(オキ)にゆきめぐりうやすひすゝりぢよわそん【十訓九】師涓といふ人を召して此聲を琴の緒にうつし給ふ○又轉じて時をうつすをいふ【徒然草上】無益なる事をして時を過すとなす云おろかなる人とかひがごと

せる人となりふべし

うつせがひ 海邊に漂着せる肉なき介の總名なり【万十二】なきのえのきしによるといふ打背貝(ウツセカヒ)うみきはとめてこまでこひめやも○又俗介名うづらがひをいふ○又俗に介名つべるがひをもいふ

うつせみ 顯(ウツ)身(セミ)にて此世に在などの身をいふ【万一】空(ウツ)蟬(セミ)のいのちををしみ浪にぬれいらごの嶋の玉藻苅りをを○又蟬蛻(モヌケ)をもいふ【源空蟬】うつせみの身をかへてける木のもとに猶人がらのなつかしきかな○又轉じて只蟬の事をもいふ【夫九】うつせみのこゑのきこゆるかなにきこゆれたつたの山になけがありけり

うづだいこん ㊗俗 菜名、蒜(タウ)菜(チサ)の一種にて莖及葉脈(スヂ)紅紫なり根大にして長く小蘿蔔の如しこれを截ればきれば紅白の巻なるすぢあり○火焰菜

うつたうしき ㊗俗 欝陶の音便らしくいひとうしきをいふ

うづたかし ク|ヽ|キ| 盛り上りて高きをいふ【宇拾三】物は見えねどうづ高くおやこそ【以字】堆(ウヅタカシ)

うつへ

土佐 挺取いうつへふるとは
あるうとのふるあらぞ

一向の意あり 万四 神木ゆも手とふるとは
を寸細ゆ人ずゆとのんばふもぬりめうる
うつへのゆう

うつへ

詞の音便
あり

うづち

枕四 五寸ぞありある卯づち二つをうづるのさゆふかしらつくあどて
江次二 次絲所進卯槌云々蔵人取之結付畫御帳懸角柱副立細木為柱槌
末出五尺許
可用桃木

正月上の卯の日此物を作りて邪氣を避
る具とす且祝の具とも漢土剛卯の類也

うつ

顯ゆ同ト 神功紀 將現授之 万五 宇都々ゆ
とあふふ〜るあ〜ぬをうゆのよるのいめ
無うるうあんさらふうをうんぬ

うつの人の
刊ツ刊ツ

うつる

うつる打棄人ハ秋風のたち
どるを宇都豆々とあゆいたらぞ 又十二 ふる
うる時ふりのゆふ物ぞ

うつて

古節 討手

うつとり 俗

忙然とうて恍惚ある
顔をうふ

うつあ 伊豫 俗

木名、櫟ゆ
同ト

うつあん

刊ツ刊ツ

蹶ゆ〜とふ意あり
皇極紀 俟其誅決矣

うづあふ

ハ口カヘ

うへのふ意ゆて心ようゆのまうくもうるを
いふ 續紀十七 天坐神地坐神乃相宇豆奈比
奉 万十八 天地の神安比宇豆奈比
ものろきのうあるまたうけて

うつと 俗

うつとものの

次條ゆ同ト
凡の罷財とのふ 紀竟宴歌 泊孫ゆ埴馬作り
一時ようを罷さへあるうゆる 伊 自ら
ものをりけるを見く 和 罷 宇都波 乃
〇又轉ずて人の罷量とるうへ

うつとり

安閑紀 檜宇凝峻
偽ゆ同ト 安康紀 知
虚言皆原

うつだり

[illegible]此[illegible] 和 [illegible] 和名宇都波利

字 [illegible] 宇豆波利

うつたる 刀川ルル

うつぶく 加キクケ

うつぶせ サシスセ

[illegible]給へば 落窪三 [illegible] 以字 伏ブス

うつぶしのり 俗

[illegible]を剥取り露[illegible]名く大二三尺[illegible]丈餘ふ至る者あり

うつぼ

和 半天河 和名水乃宇豆保乃見豆 ○又矢を納る[illegible]の名あり 著聞六 源義光い豊原時元[illegible]弟子あり云々 うつぼ[illegible]一紙の文書を取り出さ[illegible]時秋ふ見せけり

屋の上ふ[illegible]て棟を承る木をいふ 万十六 [illegible]紀[illegible]煮持て来[illegible]ふ行騰掛

[illegible]るふ同ト 持統紀 傷清白

詠求幸媚

前ふ俯[illegible]いふ 宇拾十二 走かりて

物の[illegible]ふ[illegible]

俯伏[illegible]いふ 源浮舟 かく[illegible]

[illegible]下[illegible]中ふ[illegible]

[illegible]て

海菜名、出雲十六嶋ふ産[illegible]紫菜の一種也

質細くして軟し海石ふ着て衣の如くふ

[illegible]乾を故ふ

至る者あり

空虚あるところをいふ 宇後撰 [illegible]

雌熊[illegible]子を生[illegible]

著聞六 源義光い豊原時元[illegible]

盛衰 節巻の弓ふ猿皮の軟鹿矢あり[illegible]て○又俗ふ魚名ふ[illegible]

形海鰻鱺ふ似て黄質黒斑目至て小く其歯甚利し大[illegible]経三

寸ふ至る無鱗魚あり○鱆魚○又衣の重[illegible]ふ 源玉鬘 山吹の[illegible]

[illegible]の袖口[illegible]

うつぼいらご 俗

草名、[illegible]ふ

同ト

介名、[illegible]

同ト

うつぼがひ 俗

うつぼかづら うりん 書

うつぼぐさ

玉と[illegible]る月[illegible]○又草名、葉薄荷ふ似て微尖り方茎高三四寸五月穂

を出し紫花を開く 仙傳抄 忌花の事云々[illegible]○滁州夏枯草

うつぼぞら

雨水を落を為ふ棟と棟との間[illegible]中の

空虚ある柱を立[illegible] 平家中[illegible] うつ

[illegible]の[illegible]

うづまく

うづまく の體言 後撰雑三 [illegible]

[illegible]

うきすのかゝる○又俗ゐ細き旋轉の文をゐ
いふ水の渦の形ゐ象もるあく

うづまく　カキクケ

水勢ゆよりて水紋の旋轉をいふ　拾遺雜上
川の瀬のうづまくそもそび玉もる散そた
もてる川の舟くゐ　重之集　雲居よりうづまくもあつる
滝つせの雪と見えて千代をふるかな

うづまめ

草名、葉蛇苺の如くゆて五葉或い七八九
葉の者あり春末數莖を抽つる事一尺餘
枝を分ち五瓣の黄花を生ず蛇苺より小し

○蛇含　醫心　蛇全　和名字前末女

上條ゐ同し　康水　蛇含　和名字川末女久佐

うづまめぐさ

典藥式　蛇銜　七兩
草名、排草香ゐ
同し

うつをこるくろう　俗

冬月火爐ゐ埋みて手あと暖むる火をいふ
千五百番歌合　うづを火のあくうゐ近きう
たゝ稀い春のそもをを夢ゐ見えけを　堀川百首　うづを火の
下ゐうづまくそのびあしゆきえをもる人のまら稀び
うづををん　ゆん　音

人ゐあゝせを埋を置義ゆて裏手の小門を
いふ　氏鄉記　其夜も忍びて埋門ゆて行しゐ

うづむ　マミムメ

あるべし　出羽辨集　そもとそを人
しゆうづまを名をそもの
ケククケ

物の内ゐ物とかゝををいふ　字俊藩　そゐ人
を埋むるそのかゝるゐ風吹松と思ふ
かを稀

うつむくる　ケククケ

下ゐむくるをいふ　大草相傳書　右の手をう
つむけて左の手をあふむけて

うづむ　山城加茂　俗

虫名、豉虫ゐ
同し

うつめ

内股をいふ

うづまる　ナナニヌ

字　股　字豆毛々

物ゐ覆をかゝるをいふ　枕三　あるふ人と
うづまをふしてきゝゐ　風雅雜上　庵結ぶ山路
の雪も年ふりてうつまる
身いとふ人もあし

うづら

鳥名、形狀雞雛の如くゆて肥り首小
く尾短く全身褐色ゆて黒白斑あり　椎
も足高く雌い足矮し　本和　鶉　和名字都良
里也思へどもあるぞも妹ゆあふよりあれ
和　鶉　和名字　万四　鶉あくふりゆ

うづらい　會津　俗

津輕馬腦又馬腦石あどいふ小圓
塊をあを馬腦あり

うつらうつら

るかも 土佐 めもうつらうつら鏡ゆ神の心をうちい見つる

○又俗ゆ移ふるうつらうつらとなるさやをいふ

うづらうづひ 俗

介名、螺類あり水濶く水窄く圓ゆして大あるい經三寸餘淡褐ゆして文鶉の如し

うづらうづさ 俗

草名、石胡荽ゆ

同ト

うづらたけ 俗

菌名、松蕈の上品ある者、蓋上松鱗の如く突起も其皮の斑鶉ゆ似うり

うづらだひ 俗

魚名、ごすのしたひゆ

同ト

うづらどり

鶉名、鶉ゆ同ト 記下 宇豆良 登理比禮登理加氣豆

うづらひき 伊豫 俗

虫名、山蛉ゆ

同ト

うづらまめ 俗

豆名、斑ある大豆をいふ黑くして細かき白斑あるをゆうづらまめといひ赤褐色ゆあるをいふ○斑大豆

顯の意あり 万 あづきこがの花とり持て宇都良宇都良見ゆるのゆえ君ゆる

うづらうづら 俗

水名、葉幹とも常の杉ゆして木ゆ節多く板とあして文理至て美あるものをいふ

薩摩夜久嶋より来るを以て名づけあどいふ○野雜斑

うつる

ちも云皆其呼ようり彼呼ゆ移り行意あり 源 若菜下 大約言ゆあり給ひて例の左ゆうつり給ぬ 續古 春下 かつ見てるあるぬ心の色あらばうつるとかりや花ゆうつるあるし 拾遺 恋四 おのひ中七人しあるもびゆ中ちがをうつるもいふ 佛足石歌 あるものよい宇都利ゆるとしてゆさのこうい中せ後の世のたゆあゆうの世のたゆ 古今 恋五 吹ゆうふのうぜをさむを秋萩のうつりもゆしる人のこころの

うつる テツルツル

わひうて申て後○又うたるるうつるの意ゆして中ちいふ 著聞 玄 又より合てうつるの意ゆあしけきを又負て弱ることをうつるもるる墨もゆうるのけづりけるゆ此度い重光うてゆけり 保憲女集 紅のせゆあづるゆあひうるびむびゆうてを見えれりけるゆ菊の花霜ゆるうてぬ色どかあして

うつ葉るをいふ 記上 於吹葉氣吹之狹霧 又 幣都那美曽途奴岐宇豆 水鏡下 親王と

うつろひぎく きく 音

重の色目あり 女官飾抄 うつろひ菊 表中紫 裏青 物装 移菊 面薄紫 裏青

うつろふ ハ行四段

うつるゆ意同ト 万六 うの中い常あきのと今をあるあらの都の移徙 源常本

かくまふうつろひね 万八 さく花る宇都呂布いうくゆくある長き心

ゆあやもろをけり 壬二上 長き夜ゆひとりあろゆる月かけのうつろふ浪

ぞ袖ふうつろふ

うづを 俗

次條ゆ

同ト

うづをがつを 俗

魚名、鯛鰹の一種ゆくと長尺餘脇ゆ條ゆ

くくて背より尾まいてるのあひだ雲文

あり味ひ

劣まり

うづ名

卯槌ゆ同ト く杖を作りて祝とするあり

江次三 案二脚之上置小臺云々其中作御生氣方獸形、令含卯杖、 春宮式 大

持統紀 三年正月乙卯大學寮獻杖八十枚

夫差進啓曰正月 能上卯、日 能 御杖供奉 進登 久申給登申 天二 君ゑ爲

とゆくるの山の玉椿のそひく

とをるるふのうつるを

うつを

鞦ゆ同ト 中古の音轉あり 時秋物語 うつを

うつをそくら

ようく文書をとり出て時秋ゆ見せけり

空柱ゆ同ト 夫十 よるをくら衣うつをばる

い云々うつをそくらをかく

ら浪の立うとうをゆ聞あるをかゆ此うを

題ゆくらあるる

うて

討人あり 後撰雜二 小野よくふるの朝臣はし

の國のうての使ゆかりて

うで

臂より下をいふ 和 腕 和名太々無波 一云宇天 四季物語 う

でをひくくると身をあやぶむ

うてうりこぶく 伊勢久居 俗 玩具名不倒翁ゆ

同ト

うてお

高き所又の樓閣をいふ 字 嶢榭 宇奈 和

臺榭 和名宇天奈 源夕 玉の臺ゆ同ト事あり

うど

草名宿根より生を高五六尺葉獨活ゆ似

り開く嫩苗を採て食用とす 土當歸 大草家料理書 夏菜うとあどを

て莖と抱て互生を秋月傘形の小白花攢

酒ゆくく煎て入候あり ○又草名、獨活をいふ苗大抵土當歸ゆ似たり

莖葉もありて糙澀を秋ゆ至り高さ六七尺枝端毎ゆ小白花を攢簇し

後實を結ふ根白色ゆくて氣烈し藥用とす 本和 獨活 和名宇止又 都知多良

うて うど

うとう

鳥名、うとうやを
かうを同ト

うとうしき シク シシキ

睦く親しからぬけしきをいふ 源 朝臣ひと
つかんもらあらねばうとうしき

鳥名、次條うとうやを
かうを同ト

うとうどり 俗

水鳥あり大さ鳧の如く色淡黒頸長く
背の本ゆ赤色の瓔ありて末尖る背足
共ゆ黄赤色領下より下腹ゆ至りて純白あり陸奥外う濱の産なり
新撰歌枕 そとの濱といふ所ゆうとうやをとといふ島の侍るう

うとうやをかる

うとき クシキ

親しからぬをいふ 源 末摘花 うとからぬ
ありひ給もんこと 源 帚木 うとき人ゆとき
とうちゆ祈むんやい 新勅雑四 のいとあく戀をるかある
うと濱のうとくも人ゆありゆをきるかある

うどたら 俗

草名蔓活ゆ
同ト

うと祈り

中務省の被擂官あり 職員令 内舎人九十人
掌帯ト力宿衛供奉雑使 若駕行分衛前後
源 浮舟 こゝあこのうと祈りといふ
かけいう 又 此あどうとう祈りと

うどのあ 俗

草名、蘆の一種大ゆして葉厚き者擂津鶴
殿ゆ産を其莖を篳篥の舌ゆ作る○碧蘆
親しからぬさまをいふ又轉じてい物をこ
きさを清からぬさまあどをいふ 源 末摘花
うとうちあどめ給ふ 源 桐壺 うと
ありぬるゆ

うとゆ 形 シク シキ

忌きらふをいふ 神代紀 下 吾猶謂汝有疎心 大和 ゆうとゆるかある人どもゆ
あるうのをよろづゆかど
あやうくよそへつべきこゝちあんもる
うとけき 源 桐壺 あうとき給ひと

うとむ マ ミ ム メ

うとゆをゆける世ゆこそありけ

うどん 音

小麥麪を溲て展し細く切茹る物あり
庭訓往来 餛飩饅頭 宗五大草紙 温飩る点
心して候へとも殿上ゆても私う
ゆくする一獻ゆ見及むを候

うどんげ うどん 和 げ 音

優曇鉢羅の畧ゆて漢ゆ瑞應又靈瑞と譯
を實のを有りて花あり樹の名あり若し
譬とも 源 若菜 うどんげの花ゆ
出づとも轉輪王出とゆいひ希ある事の
めつらしうつら祈 榮 樵 よゆあり
花ゆもえてるるこゝらしてこゝやをざるらゆ
芭蕉の花をるいふ 東 廿六 於件坊庭優曇花開散之由風聞云々爲後被見
事うどんげの如く○又

うど

之處芭蕉花由申之○又加賀の俗ゆ果名、のちぢめくちなふ○又一種小虫の卵とりふ草木の枝上又屋内器物上ゆも着く長四五分細くして白糸の如く尖ゆ白き小卵有て花苞の如し此虫い一種せうしゞちゆ似て蚕類あり

うどんどうふ 音

庖丁家の名目あり 大草家料理書 うどん豆腐料理い常ゆ細く切て湯ゆをくて贈油ゆ山椒胡椒を入てよゝ也但別流ゆい作様薄く細く長き様ゆ有之

うどめ

ふ○吻頭 庭訓往来 醍醐烏頭布○又俗ゆ土當歸の根上の萌芽紫色ゆしてすゆ盈ざるをものふ秋末冬初食物の點綴とす

うどもどゝ 俗

草名、莖葉花實獨活ゆ異あゝ只莖葉の節深紫あり山城高雄山ゆ多し故ゆ又高雄羌活の名あり○羌活

語彙巻十一